



平成二十八年 文化庁 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業

アートでつなぐ 特別支援学校と 地域との連携事業 記録集

目次

- 02 はじめに
- 04 全体スケジュール
- 06 西日野にじ学園 ガイダンス授業①
- 07 西日野にじ学園 ガイダンス授業②
- 08 西日野にじ学園 美術館体験①
- 10 玉城わかば学園 ワークショップ①・②
- 13 西日野にじ学園 ワークショップ
- 16 西日野にじ学園 学校美術館
- 20 玉城わかば学園 学校美術館
- 24 玉城わかば学園 西日野にじ学園 ワークショップ成果展示
- 26 玉城わかば学園 美術館体験①
- 27 西日野にじ学園 美術館体験②
- 28 「アートでつなぐ・特別支援学校と地域との連携事業」を終えて 鈴木麻里子
- 30 特別支援学校でのワークショップを終えて 貴家映子
- 31 担当教員のコメント

はじめに

三重県立美術館では、平成27年度に展示室改修のため約4か月の閉室期間を設けた。その機会を利用し、文化庁の助成を受けて（「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」）、周辺の社会教育施設と連携した地域の魅力発信事業、所蔵品の移動展示等、アウトリーチを含む多くのプロジェクトを展開した。その一つが、特別支援学校との連携事業である。初回である昨年度は、他者＝デザイナーとのコラボレーションで生徒が自らの可能性の広がりを実感することをねらいとし、デザイナーが生徒の作品をもとに製品（Tシャツ）を製作した。年度末に館内で行ったTシャツ展示は好評を博し、作品返却後も各校でTシャツが活用されているという嬉しい話も耳にした。その一方で、初めての取り組みだったがゆえに、学校と十分にコミュニケーションを図ること等、改善すべき課題も多く見出すことができた。

28年度の事業を計画するにあたり、当館では美術館固有の資源（ソフト、ハード）をより効果的に活用する方法を再検討した。特別支援学校の教育方針のなかでも、ますます重視される傾向にある学内外の交流促進を目的とした①「学校美術館（美術館所蔵作品の学校での展示）」【美術館のコレクションを活用】、学外者との交流を通して、生徒が他者から認められ自尊感情を高めるための②「アーティストによるワークショップ」とその③「成果展示」【ともに美術館の実績や機能を活用】。この3本を柱として、それ以外の事業（美術館体験、学校での美術館スタッフによるガイダンス授業）は、既定の年間スケジュールに差し障りのない範囲で、各校にオプションとして追加してもらうこととした。連携校はともに知的障がいのある児童生徒が通う、県内有数の大規模校、三重県立特別支援学校玉城わかば学園と三重県立特別支援学校西日野にじ学園に決まった。

打合せや準備も含めると1年以上、時には学芸室のスタッフ総出でこの事業に取り組んできたことになる。この記録集を編集している現在もプロジェクトは進行中であり、ピリオドを打って後ろを振り返るのは容易ではない。それでも、この混沌とした事業全体をいちど整理して検証し、簡潔であっても公開できる記録集の作成を目指した。記録集の情報はこの活動の一端を示すに過ぎないが、少しでも事業の関係者にとって有用な記録となり、本事業に関心のある方の役に立つことができれば幸いである。

2017年3月



三重県立美術館

アートでつなぐ・特別支援学校と地域との連携事業実行委員会

実行委員会構成

委員長	速水 豊	三重県立美術館館長
副委員長	小林 春美	四日市市役所市民文化部理事（文化力推進担当）
委員	平生 公一	玉城町教育委員会事務局生涯教育課課長補佐
委員	井川 佳久	三重県立特別支援学校西日野にじ学園校長
委員	中川 悦子	三重県立特別支援学校玉城わかば学園校長
委員	大藤 久美子	三重県立くわな特別支援学校校長
委員（監事）	田川 敏夫	三重県立美術館友の会理事長



連携校

三重県立特別支援学校	玉城わかば学園	（三重県度会郡玉城町宮古726－17）
三重県立特別支援学校	西日野にじ学園	（三重県四日市市西日野町4070－35）

謝辞

この事業を実施するにあたり多大なご協力をいただいた関係諸機関、関係者の方々、およびここにお名前を記すことを控えさせていただいた方々に深く感謝の意を表します。（敬称略）

松岡 徹

小田 久美子

今井 朋

河田 亜也子

端山 聡子

河上 祐子



6月8日 (水)
西日野にじ学園にて
ガイダンス授業①を開催

6月22日 (水)
西日野にじ学園にて
ガイダンス授業②を開催

9月13日 (火)
西日野にじ学園が
美術館を訪問

11月25日 (金)
玉城わかば学園で
ワークショップを開催
(1日目)

12月9日 (金)
玉城わかば学園で
ワークショップを開催
(2日目)

12月8日 (木)
西日野にじ学園で
ワークショップを開催

12月20日 (火)
西日野にじ学園にて
学校美術館を開催

2月14日 (火)
三重県立美術館にて
ワークショップ成果を展示
(3月12日 (日) まで)

1月13日 (金)
玉城わかば学園にて
学校美術館を開催

2月24日 (金)
玉城わかば学園が
成果展示を見学

3月8日 (水)
西日野にじ学園が
成果展示を見学



2016/06/08 水 13:15-14:30

西日野にじ学園 ガイダンス授業①

於:西日野にじ学園多目的室

担当:鈴木麻里子・田中善明、藪沙織(三重県立美術館学芸普及課)／田口万紀(西日野にじ学園高等部)

参加生徒:西日野にじ学園高等部1年生20名

三重県立美術館とはどんなところ?という話からスタートし、美術館の所蔵する人気作品マルク・シャガール《枝》について、はじめは作品写真を見せずに説明。想像を膨らませながらグループで《枝》のジグソーパズルを完成させ、最後にシャガールの透明感あふれる《枝》の彩色表現に、画家のステンドグラス鑑賞・制作体験が関係していることを紹介した。

掲載:大西里奈「シャガールの感性学ぶ 西日野にじ学園 県美が出前授業」『中日新聞』(北勢版)、
2016年6月9日付



2016/06/22 水 13:15-14:30

西日野にじ学園 ガイダンス授業②

於:西日野にじ学園多目的室

担当:田中善明・鈴木麻里子、藪沙織(三重県立美術館学芸普及課)／田口万紀(西日野にじ学園高等部)

参加生徒:西日野にじ学園高等部1年生20名

ガイダンス授業①の最後に紹介した「(ステンドグラスの) 素材は光そのもの」というシャガールの言葉を受けて、ステンドグラスを通したカラフルな光を教会内で浴びる疑似体験を行った。段ボールの側面に穴をくり抜き、セロファンを貼付。段ボールを組み立てて装飾し、最後に作った箱をかぶりセロファンを通して入り込む光の色を楽しんだ。



西日野にじ学園 美術館体験①

担当:鈴村麻里子、藪沙織:田中善明、道田美貴、生田ゆき、貴家映子、樋口萌(三重県立美術館学芸普及課)／
田口万紀(西日野にじ学園高等部)

協力:三重県立美術館ボランティア「樺の会」会員20名

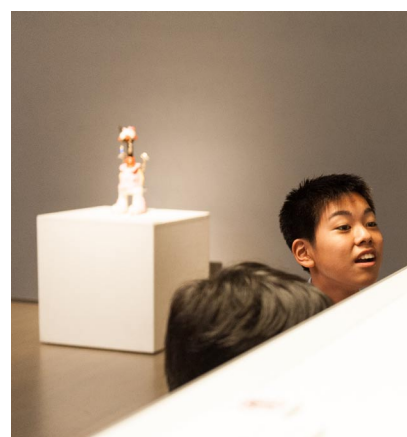
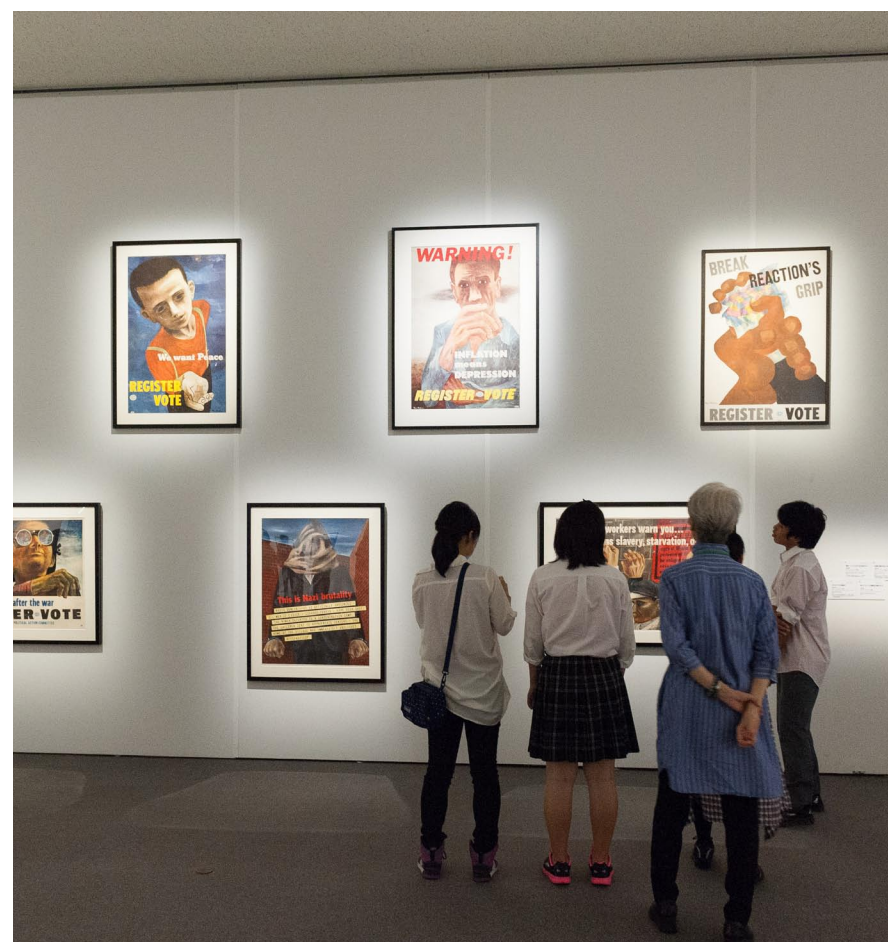
参加生徒:西日野にじ学園高等部1年生48名

引率者:西日野にじ学園教職員18名

講堂でのオリエンテーション(鑑賞時のマナー説明)の後、クラス毎に「丸沼芸術の森所蔵 ペン・シャーン展」「美術館のコレクションⅡ」「柳原義達の芸術Ⅱ」「丸沼芸術の森の作家たち展」を見学した。6月のガイダンス授業は高等部1年生の一部の生徒が受講していたが、この9月の美術館体験から、対象を高等部1年の全生徒に拡大した。各クラスには美術館ボランティア「樺の会」の会員が3名程度付き添い、生徒らと一緒に展示を鑑賞した。ガイダンス授業で取り上げたシャガール《枝》も、常設展示室で鑑賞。作品を覚えている生徒も多く、口々に感想が飛び出した。見学後、館内で昼食をとり、下校時刻に間に合うよう帰校。

生徒の感想(後日、学校より送られたメッセージから抜粋)

- 大きな絵がいっぱいあってびっくりしました。
- 心に残った作品がありました。それは、黒い海の底の絵でした。その絵を見て、感動しました。少し青い光がさっていて、あたりは、ほとんどが暗い海の底でした。その作品は、私にとって忘れられない作品です。
- シャガールの絵は自分が思っていたより大きくてビックリしました。案内していただいた時はあまりゆっくりみれなかったので今度は家の人と行ってゆっくりみたいです。
- 時どき自分にも描けそうなものもありました。
- 本物のシャガールの「枝」を見た時は本当に感動しました。初めて美術館に行って、色々な絵とか作品を見て本当に良かったです！
- カメラでとってくれてありがとうございました。
- 友達と、いっしょにいけたのが、とてもうれしかったです。
- 私は学校の行事として行くのは二回目になりますが、前回行った時とはまた違う作品を観ることが出来、とても楽しく、嬉しかったです。



2016/11/25 金 10:35-12:25

玉城わかば学園 ワークショップ①

講師:松岡徹 於:玉城わかば学園陶芸室 高等部普通コース1年1組、5組、6組の計22名が参加
担当:貴家映子、樋口萌:生田ゆき、鈴村麻里子(三重県立美術館学芸普及課) / 大山展弘(玉城わかば学園高等部)
協力:金沢みのり / 縣智奈(名古屋芸術大学美術学部アートクリエイターコース3年)、出口俊一(同コース4年)

両日とも、「好きな生き物」をテーマに紙製のランプを制作した。
まず、彫塑用の粘土を用い、想像したり写真を参考にしたりしながら自由に生き物を造形した。
出来上がった粘土像をラップフィルムで包み、顔料入りの水で溶いた木工用ボンドを刷毛で塗りながら、ティッシュペーパーを貼りつけ、紙張子を作る要領でランプの外側を完成させた。
その後、乾燥させた作品は名古屋芸術大学へと運び込まれ、松岡氏と学生たちの手によって、粘土が取り出されLED電球が入れられてランプに仕上げられた。



2016/12/09 金 10:35-12:25

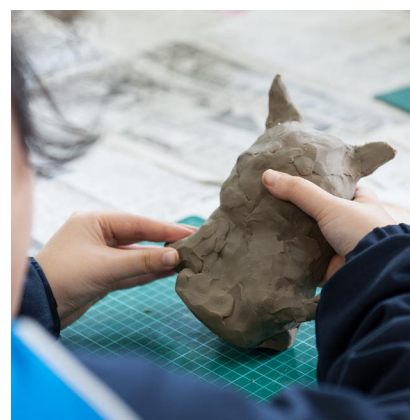
玉城わかば学園 ワークショップ②

講師:松岡徹 於:玉城わかば学園陶芸室 高等部普通コース1年2組-4組の計21名が参加
担当:貴家映子、樋口萌:鈴村麻里子、藪沙織(三重県立美術館学芸普及課) / 大山展弘(玉城わかば学園高等部)
協力:鈴木恵実 / 縣智奈(名古屋芸術大学美術学部アートクリエイターコース3年)、木下千穂(同コース3年)

生徒の感想(後日届いた感想文より抜粋)

- 粘土を集めてもむのは固くて大変でしたが、形ができたときはスッキリしました。
- 時間をかけすぎてデカいのを作ってしまった。でも作るのは楽しいです。
- ぼくはワニのランプシェードを作りました。短い脚をつけるのが難しかったです。できあがりがとても楽しみです。
- ティッシュをさいしょだけでつだってもらってありがとうございました。ティッシュのつけるのがなれてきて自分でティッシュはるの覚えました。





2016/12/08 木 10:00-14:45

西日野にじ学園 ワークショップ

講師:松岡徹 於:西日野にじ学園高等部教室、多目的室 高等部1年生42名が参加

担当:貴家映子、樋口萌、鈴村麻里子、藪沙織(三重県立美術館学芸普及課) / 田口万紀(西日野にじ学園高等部)

協力:金沢みのり、西村怜奈 / 東大地(名古屋芸術大学美術学部アートクリエイターコース1年)

6月のガイダンス授業で鑑賞・体験したステンドグラスの制作を追体験できるようなシートの制作を丸1日かけて実施した。テーマは、玉城わかば学園と同様に「好きな生き物」。午前中は各教室に分かれて、事前に用意した下書きを出来上がりのステンドグラスのイメージにあわせて修正したり描き足したりしたのち、縁取り用の黒い顔料で輪郭線をなぞる作業を行った。午後は、木工用ボンドに顔料を混ぜた絵具を用いて、縁取り内部に色をほどこした。色付きボンドは乾燥すると透明になり、ガラスに直接貼りつけることができる。

講師コメント

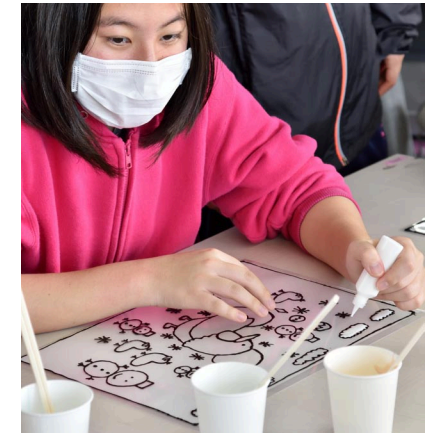
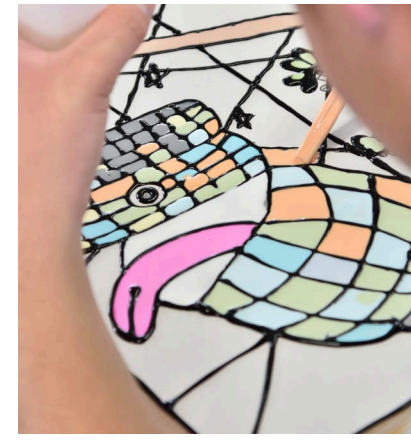
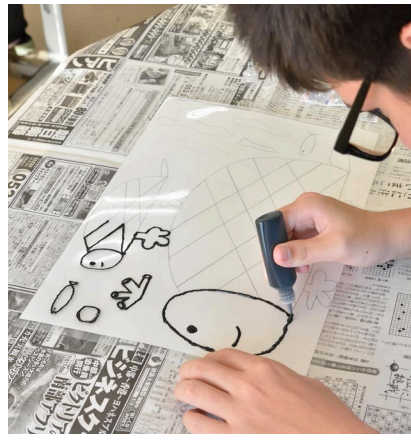
特別支援学校でのワークショップは初めてだったので、生徒のみんながワークショップの内容に興味を持って最後まで制作してくれるのか、どう接すれば良いのか不安がありました。しかし、ワークショップ当日はそれぞれの学校の先生方、美術館の皆さんにお手伝いいただきながら、それこそみんなと一緒に楽しく制作ができました。本当はたった1日で完成するにはなかなか大変な内容でしたが、みんな最後まで集中して制作してくれたので、作品は一つ一つ思いの詰まった素晴らしいものになったと思います。一緒に制作ができてとても楽しかったです。ありがとうございました。

講師紹介

松岡 徹(まつおか とおる)

名古屋芸術大学美術学部アートクリエイターコース 准教授
1968年愛知県岡崎市生まれ。名古屋芸術大学美術学部絵画科版画コース卒業、同研究生修了。芸術修士。バルセロナ大学大学院留学。絵画、版画、彫刻など様々な手法を用いて、ユニークでときにユーモアあふれる造形作品の制作を行う。2001年から、愛知県佐久島でのアートワーク設置を継続して行っているほか、美術館などでのワークショップの経験多数。





西日野にじ学園 学校美術館※

於:西日野にじ学園校長室

主催:アートでつなぐ・特別支援学校と地域との連携事業実行委員会、三重県立特別支援学校西日野にじ学園

担当:生田ゆき、鈴村麻里子、藪沙織:田中善明、樋口萌、太田聡子(三重県立美術館学芸普及課)／

田口万紀、伊藤敦子(西日野にじ学園)

来場者:西日野にじ学園児童生徒、教職員、保護者、学外者 合計365名

担当教員との打合せを通して、視覚以外の感覚も使って作品が鑑賞できるような展示を目指した。校舎入口からアクセスの良い校長室を借り、触覚も使いながらじっくり鑑賞できるよう、彫刻作品を9点のみ出品した。児童生徒数が多く、各クラスの滞在時間が限られるため、9点のうち、佐藤忠良《群馬の人》、舟越保武《OHNO嬢》、三木富雄《耳》の3点に限り、触って鑑賞することを可能にした。上記3点とそれ以外の6点は台座の色を変え、少しでも区別が容易になるようにした。

入場前には、廊下でぬいぐるみを使用しながら、やさしくゆっくり触るリハーサルを行い、ウェットティッシュで手を拭いてもらった。各クラスの来場時間は担当教員が整理して事前にスケジュール表を作成。常時美術館スタッフが会場に控え、児童生徒と作品鑑賞の時間を共有した。児童生徒と引率教員のみならず、近隣施設の人々や近隣住民、給食の調理やスクールバスの運転に従事するスタッフも来場した。

触っても良い展示にすることによって、ただ「触る」ことが目的になってしまうのではないか、という危惧はあったものの、作品と鑑賞者がしっかりと「繋がる」ために、物理的な接触は非常に有意義であるように感じた。人物の頭部は、児童生徒が自身の経験や知識をもとに、想像したり、比較したりしやすいモチーフだったようだ。「お母さんに似ている」「○○さんだ!」等の感想が来場者の口から飛び出していた。少数ではあるが、作品を怖がり入場をためらう生徒もいた。



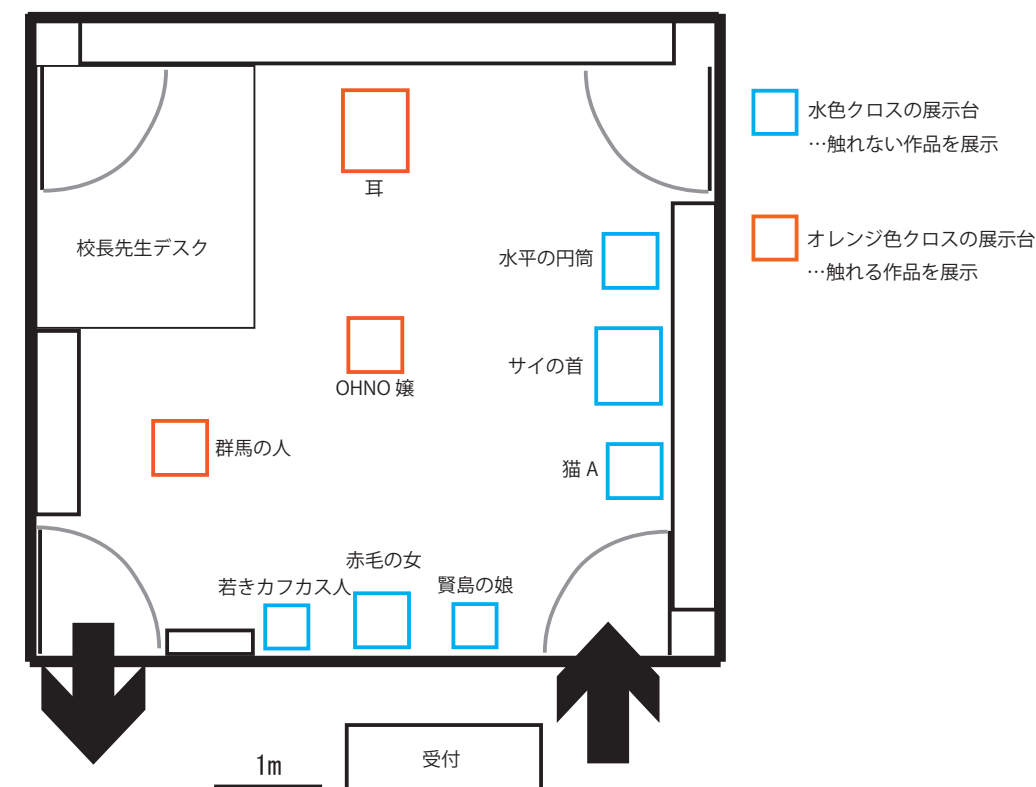
※「学校美術館」とは

三重県立美術館では県内各地で所蔵作品を展示する「移動美術館」を1986年から継続的に開催してきた。「学校美術館」は「移動美術館」の派生形で、展覧会場が学校となる場合にこの呼称を用いる。初めて開催したのは2003年6月12日(於:伊勢市立北浜中学校)。「移動美術館」との相違点は、児童生徒が事前に鑑賞したい作品を選ぶこと、複数日にわたって開催できないため1日限りの展覧会になること、美術館の学芸スタッフが会場に常駐すること等。なお、今回の2校の「学校美術館」では、児童生徒による作品選定は行わなかった。

来場者の感想(鑑賞後アンケートより抜粋、特記のない感想は生徒のもの)

- 人の顔や頭がデコボコしている所とツルツルしている所があっておも白かったです。
- サイの頭で本物のサイの頭の大きさかと思いました。
- 作品に触れることはムリでも同じ素材、絵の具などに触れられるような機会があるといいです。(教職員)
- 若きカフカス人っていう作品は、リーゼントでかっこよかったです。猫Aっていう作品は、かわいくて、こまかい所までできていてすごかったです。
- 「耳」の作品、どうやって作ったかな?
- おもしろかったけど、ちょっと不思議だなとぼくは思いました。
- どうぞうをさわって見てひんやりとつるつるとざらざらしました。
- サイの首がなかなかよかったです。ぜひぼくも家で作りたいと思います。
- さわれて記おくにのこり一部分に注目出来るのが良かった。
- 芸術がこんなに身近に感じられて、よかったです。(学外者)
- 触ることができてよかった。(作品に触れたので「よかった」「うれしかった」という感想多数。回収した54枚のアンケートのうち19枚に、触る鑑賞について肯定的な意見が書かれていた。対して、「見る」ことができて「よかった」「うれしかった」という感想を書いたのは7名。)

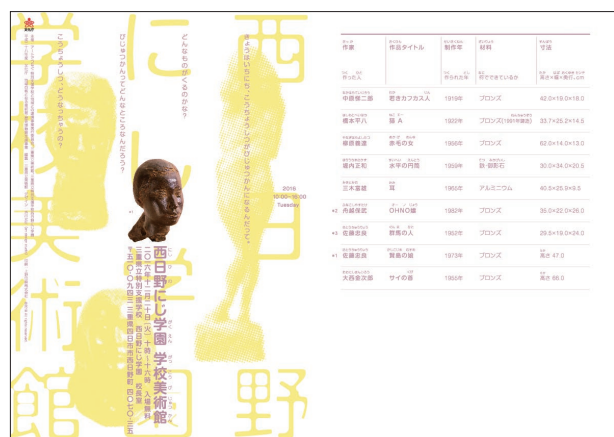
掲載:曾田晋太郎「彫刻作品見て触れて」『中日新聞』(北勢版)、2016年12月21日付



展示プラン



さっか 作家	さくひん 作品タイトル	せいさくねん 制作年	ざいりょう 材料	さんぽう 寸法
つく　ひと 作った人		つく　とし 作られた年	ざに 何でできているか	たか　はば　おくさ　センチ 高さ×幅×奥行、cm
なかばていしろう 中原徳二郎	わか　じん 若きカフカス人	1919年	ブロンズ	42.0×19.0×18.0
はしちとへい/はち 橋本平八	ねこ　エー 猫　A	1922年	ブロンズ(1991年塑造)	33.7×25.2×14.5
やなぎばよしひつ 柳原義達	あか　げ　おんな 赤毛の女	1956年	ブロンズ	62.0×14.0×13.0
けいうちとせきかず 堀内正和	すいへい　とんどう 水平の円筒	1959年	てつ　みかげいし 鉄・御影石	30.0×34.0×20.5
みきとみお 三木富雄	みみ 耳	1965年	アルミニウム	40.5×25.9×9.5
ふねにしやすはけ 舟越保武	オー　ノ　じょう OHNO嬢	1982年	ブロンズ	35.0×22.0×26.0
さとうちやうりょう 佐藤忠良	ぐん　ま　ひと 群馬の人	1952年	ブロンズ	29.5×19.0×24.0
さとうちやうりょう 佐藤忠良	かしこじま　むすめ 賢島のお娘	1973年	ブロンズ	たか　高さ 47.0
おおにしとんじろう 大西金次郎	くび サイの首	1955年	ブロンズ	たか　高さ 66.0



玉城わかば学園 学校美術館※

於:玉城わかば学園体育館

主催:アートでつなぐ・特別支援学校と地域との連携事業実行委員会、三重県立特別支援学校玉城わかば学園

担当:生田ゆき、鈴村麻里子、藪沙織、樋口萌、上田裕之、浜田正尋（三重県立美術館）／

生川朋義、中川悦子（玉城わかば学園）

協力:三重県立美術館ボランティア「櫂の会」会員12名

来場者:玉城わかば学園児童生徒、教職員、保護者、学外者 合計386名

広い体育館が会場となったため、幅広く、数多くの作品を展示するプランを考えた。彫刻・立体については西日野にじ学園と同じ9点（ただし、玉城わかば学園では「触る」鑑賞を行っていない）、それに加えて、絵画・版画・素描を16点展示した。これまでの「学校美術館」で展示したことのある、ガラス・アクリル等による表面保護のある作品から展示作品を選択。章立てはとくに行わず、共通点を見つけやすく比較しやすいと思われる作品を数点ずつまとめて展示した。

鑑賞時のマナーを説明する役割や、一緒に作品を見る役割を、普段美術館内で学校団体の案内を行っている当館ボランティア「櫂の会」会員が担った。西日野同様、担当教員が全校の来場スケジュールを組み、ほぼ10分おきに20名程度（合同クラス）が来場。混雑を避けるため、あらかじめ学外者（保護者含む）の来場時間を12:00－13:20および14:20－15:30、学内者の来場時間帯を10:00－15:00に設定した。

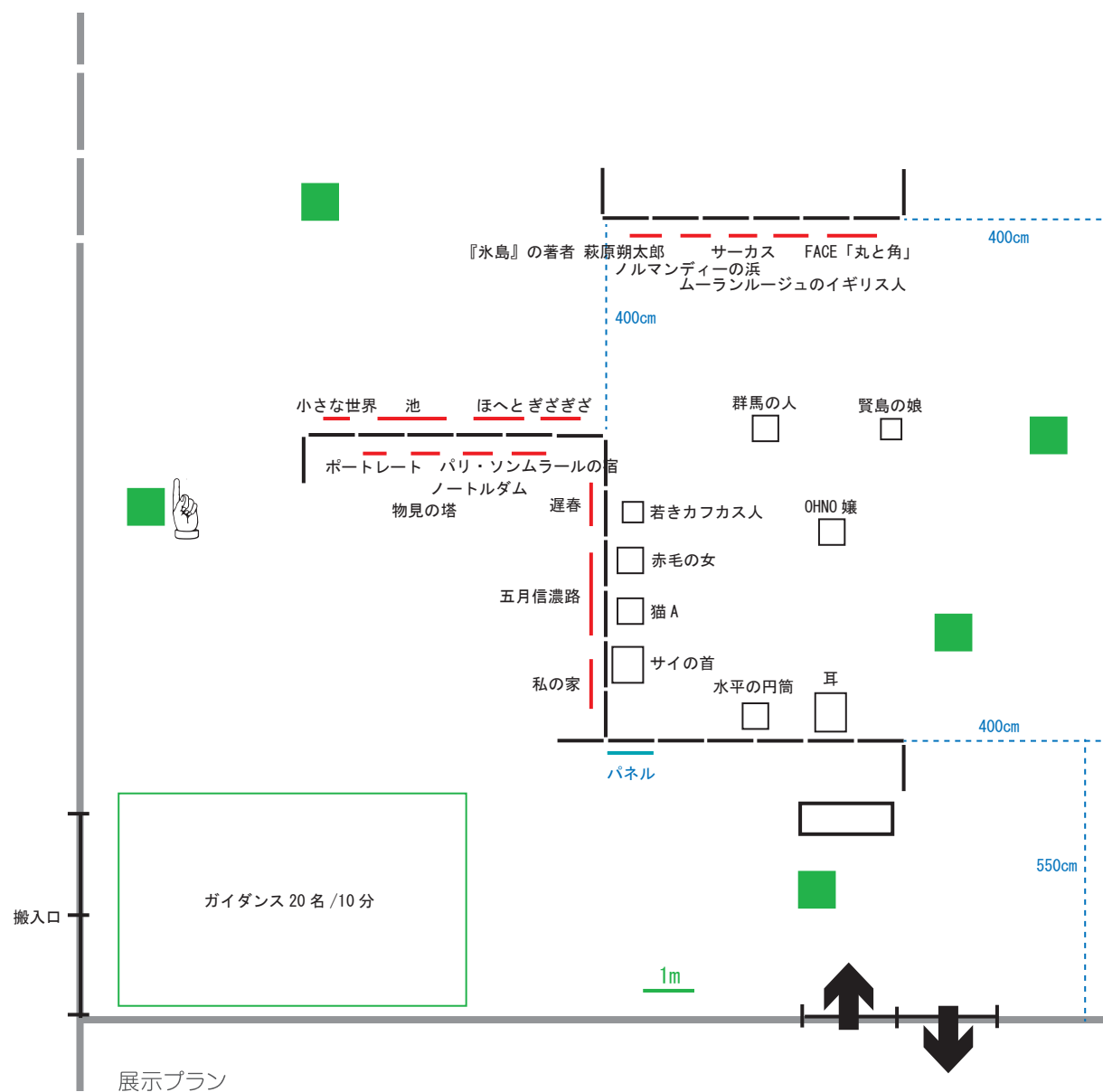
既に松岡氏によるワークショップを経験していた高等部1年普通コースの生徒が来場した時には、粘土で「好きな生き物」を作り出した塑造の体験が、ブロンズ彫刻の鑑賞体験に結び付けられるよう声掛けを行った。

「学校美術館」は、開催当日の早朝に作品およびパネルを積込み、学校で設置・展示を行い、閉幕後は撤収作業を行い、その日のうちに美術館に作品を搬入する。当日は会場準備が予定開場時刻に間に合わず、10分遅れての開場となった。また、交流校である下外城田小学校の児童は学級閉鎖のため来場が叶わなかった。様変わりした体育館を前に、はじめは戸惑う児童生徒の姿も多く見受けられたが、徐々に自分なりに感じたことを言葉や体でのびのびと表現していくように感じられた。放課後、保護者と一緒に再度来場した生徒もいた。

来場者の感想（当日回収したアンケートより抜粋、特記のないものは児童生徒のもの）

- ちょうこくで、こまかく刻ざんだりして工夫していてきれいでした。またいろいろと楽しみにしています。
- また学校に来てください。
- 普通高校等でも実施してみえるのでしょうか?なければぜひ。(学外者)
- もう少し数があると良かったです。(学外者)
- 鑑賞後、具体的な作品名を挙げながらさまざまな感想を話す生徒がいた。(後日、教員からの報告)

掲載:関俊彦「学校が“美術館”に変身」『中日新聞』（伊勢志摩版）、2017年1月14日付



2017/02/14 火 03/12 日

玉城わかば学園 西日野にじ学園 ワークショップ成果展示

展示指導:松岡徹 於:三重県立美術館 美術情報室前

主催:アートでつなぐ・特別支援学校と地域との連携事業実行委員会、三重県立美術館、
三重県立特別支援学校玉城わかば学園、三重県立特別支援学校西日野にじ学園

ワークショップ・展示協力:名古屋芸術大学

担当:鈴村麻里子、貴家映子、樋口萌:田中善明、生田ゆき(三重県立美術館学芸普及課)

協力:西村怜奈/伊藤みのり、小川達也、下岡さくら、

西村美香(名古屋芸術大学美術学部アートクリエイターコース2年)、木下千穂(同コース3年)

来場者:3,104名

本誌10-15ページに詳細を記した玉城わかば学園、西日野にじ学園でのワークショップで制作された作品を、三重県立美術館の美術情報室前で展示した。名古屋芸術大学で油粘土を取り除きLEDライトを仕込んだ「紙貼りランプ」は5点ずつ連ねて計10列、天井のダクトから吊り下げ点灯した。西日野にじ学園の「ステンドグラス」は、美術情報室と廊下を仕切るガラスに貼付。作品に加えて、各校の制作風景をモニターで上映。作品を出品する生徒が、家族や友人を展示に招待できるよう、招待ハガキも作成し配布した。

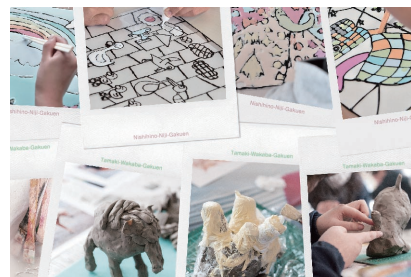
ワークショップ当日に欠席した生徒も、教員のサポートで後日作品を制作。最終的には玉城わかば学園高等部普通コース1年の生徒45名、西日野にじ学園高等部1年の生徒46名の作品展示が叶った。ワークショップの準備段階等に、名古屋芸術大学の学生、美術館スタッフが制作した作品も数点ずつ生徒の作品とあわせて展示した。

「紙貼りランプ」と「ステンドグラス」はいずれも空間に入り込む外光の影響を受けながら、時間や天候の変化に伴ってさまざまな表情を見せた。

掲載:

「自作のランプとステンドグラス」『伊勢新聞』、2017年2月15日付

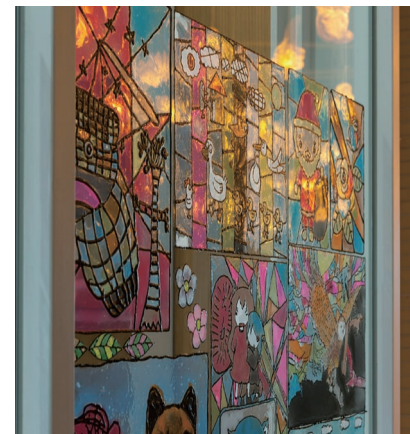
橘堇「目を引く明かりや色彩」『中日新聞』(広域三重版)、2017年3月6日付



成果展示ハガキ(通信面)



成果展示ハガキ(宛名面)



2017/02/24 金 10:15-11:25

玉城わかば学園 美術館体験①

担当:鈴村麻里子、貴家映子、樋口萌:田中善明、道田美貴、生田ゆき、藪沙織(三重県立美術館学芸普及課)／
大山展弘(玉城わかば学園高等部)
協力:三重県立美術館ボランティア「樺の会」会員15名
参加生徒:玉城わかば学園高等部普通コース1年生43名
引率者:玉城わかば学園教職員19名

講堂で11-12月のワークショップの写真を見せたり、鑑賞時のマナーについて話したりした後、2クラスずつ3グループに分かれて、ワークショップの成果展示や、「柳原義達の芸術Ⅳ」、「再発見!ニッポンの立体」展の一部を鑑賞。作業台の上で制作した作品が、頭上に吊り下げられていたため、自身の作品をすぐには特定できない生徒もいたが、事前に美術館スタッフや教員に渡していた展示プランをもとに、一人一人自分の作品を見つけ出すことができた。展示室では立体作品を数多く展示していたことから、ワークショップでの経験と鑑賞をつなげるための声掛けも行った。鑑賞時間は正味30分程度だったが、教員からは適度な長さだったという声が聞かれた。

生徒と一緒に作品を鑑賞したボランティアの声

- フィギュアを見て「目が動いたよ」など楽しそうに話しかけてくれた。
- 自分の作品を見て、とても楽しんでた。
- それぞれの生徒一人一人が自分の好きな作品、興味のある作品が違い、楽しんで鑑賞している様子が分かった。



2017/03/08 水 11:00-13:10

西日野にじ学園 美術館体験②

担当:鈴村麻里子、藪沙織、貴家映子、樋口萌:田中善明、道田美貴(三重県立美術館学芸普及課)／
田口万紀(西日野にじ学園高等部)
協力:三重県立美術館ボランティア「樺の会」会員25名
参加生徒:西日野にじ学園高等部 1年生48名
引率者:西日野にじ学園教職員17名

講堂に集まり、12月のワークショップの話をしたり、現在見られる展示について説明したりした後、A-Gの各クラスに分かれてワークショップ成果展示をはじめ館内の展示を鑑賞した。今回は9月に続いて2度目の来館であったため、美術館スタッフが鑑賞順序を決めるのではなく、生徒・教員と担当のボランティアの当日の相談の上で、各グループが自由に美術館体験を楽しむこととした。出席を予定していた生徒は1人の欠席もなく来館することが叶った。天候にも恵まれ、鑑賞後の昼食時間も含めて、前回よりリラックスして美術館体験を楽しむことができたのではないだろうか。

生徒と一緒に作品を鑑賞したボランティアの声

- 3人の男の子は立体作品に興味を示し3人で話し合いながら楽しく丁寧に鑑賞していた。
- 常設展示室の浅野作品[浅野弥衛の作品]に興味があり、想像豊かに何かに見えるかと話していた。
- 回を重ねることで、子ども達への間の取り方も私なりにできるようになり、楽しく参加させていただいた。
- 前回[9月13日の来館時] お会いしたお子さんがいて、懐かしかった。



「アートでつなぐ・特別支援学校と地域との連携事業」を終えて

鈴村 麻里子

「美術館」には何ができるのか。

今年度は幾度もこの問いを自分自身に突き付け、立ち止まり、悩む必要があった。筆者個人ではなく、美術館という組織、建物、理念を広い視点で捉え、その可能性を信じて「できること」を考えなければならぬ。美術館活動の可能性は、外部との連携によって、どこまで広げることができるのだろうか。

以前から、特別支援学校の生徒が来館する機会はあったものの、デリケートな作品が並ぶ美術館で生徒がマナーを守って鑑賞できるか、大きな不安を抱いている教員が多いように感じていた。不安を抱えるのは教員に限ったことではない。自分自身も、慣れない対応の末、事故なく鑑賞を終えられたことに胸をなでおろした経験があり、彼らにもっと別のかたちで充実した体験を提供できないか、という思いはしだいに強くなっていった。そのようななか、特別支援学校の研究発表会にも何度か出席する機会を得て、教育現場の活発な活動を垣間見ながら、児童生徒が生きるための術を教える学校特有の視点に関心を抱くようになる。そして、2ページでも触れた通り、昨年度あらゆる人々を巻き込むプロジェクトの一環として、特別支援学校と本格的な連携を始動させるに至った。

今年度の事業計画にあたり、美術館の特性（ソフト面、ハード面）を見直し、何がどのように活用できるか、一から検討を行った。最初に着目した資源は、言わずもがな、美術館のコレクションである。多くの人々の目に触れるために集められた作品は、美術館活動の核であり、強い訴求力を持つ。今回のプロジェクトでは、学校が地域との連携を方針として掲げる現状を踏まえ、美術館の作品を、生徒の美術体験のみならず、学内外の交流促進に役立てる「学校美術館（美術館所蔵作品の学校での展示）」を企画した。

続いて、美術館資源のソフトに目を向けた際、博物館教育の現場で活用されるようになって久しい「ワークショップ」が、特別支援学校の課題解決にも有効なのではないかと考えた。柔軟な発想に基づいて自由に創造するアーティストを招き、風を吹き込むような「ワークショップ」ができないだろうか。

そして「展示」。美術館のあらゆる活動のなかで、最も人口に膾炙しているものは「展示」だろう。美術館が有する「展示」の資源は決してハード面にとどまらない¹。ソフト面を含む美術館の潜在能力を活かして、ワークショップの成果を展示することを事業の3本目の柱とした。以上、1)「学校美術館」2)「アーティストによるワークショップ」3)「ワークショップの成果展示」、この3本の柱が、本事業の中核を成すこととなった。

昨年度来、教員とのやり取りを通してつくづく感じたのは、良くも悪くも美術館には期待が寄せられているということだ。もちろん、

現場の調整が大変なことと裏返しかもしれないが、「せっかく美術館と連携するので」という言葉は何度も耳にした。そのたびに、美術館の特性とは何だろうか、期待に応えられるだろうか、学校が美術館に求めているのは、「創作」の指導や評価、さらには造形作家の育成なのではないか、と不安な気持ちになった。加えて、特別支援学校では、既に工夫を凝らした制作や展示から製品の販売まで、あらゆる取組が行われている。そこに美術館が割って入る以上、現場の教員にも美術館との連携の意義、メリットを明示する必要がある。

美術館の「できること」を考える上で参考となったのは、以前鑑賞した1本のドキュメンタリー映画だった。タイトルは『クラス・ルーヴル』²。パリ19区、ベルクソン高校には、ルーヴル美術館の作品を活用しながら年間通してあらゆる教科の授業を受けられる特別なコースが存在する。『クラス・ルーヴル』はそこで学ぶ高校生の1年間を追った映像作品である。映画の終盤、生徒がルーヴル美術館に家族を招待し、自分の好きな作品の前でプレゼンテーションをする場面がある。そこでは、美術館の荘厳な雰囲気や、明らかに発表者の自信を高める装置として機能していた。ネガティブに捉えられかねない美術館の特徴も、このような演出には奏功するのかもしれない。歴史的傑作を前に、誇らしげに発表を行う生徒たちは、家族の目には新鮮に映ったに違いない。このコースで活用されるのはあくまで美術館の「作品」ではあるが、作品にとどまらず、あらゆる美術館資源もこの教育活動に活かされているのではないか。

自尊感情の低い生徒に何とか自己肯定感を抱かせたい、ということとは昨年度の連携校の教員からもたびたび聞かされてきた話であるし、実際に生徒と接する上で、自尊感情向上の必要性を実感することは幾度もあった。美術が自己表現、自己肯定と親和性が高いのであれば、美術館はそこに積極的に関わることができるのではないだろうか。

ルーヴル美術館とは比較にならないにせよ、「美術館神話」をポジティブに活用すれば良いのでは、という思考が事業計画の推進力になった。「ワークショップ成果展示」のために招待ハガキを作成したのも、出品者自らが、近しい人々を美術館に招き、彼らの視線と美術館資源を糧に自己肯定感を高めるという目標のためである。

以上が、今回の一連のプロジェクト成立の経緯である。実際に事業を進めるなかで、最初予測していた美術館の「できること」は良くも悪くも大きく輪郭を変えた。「学校美術館」の会場が多くの学外者の来校を受け容れられる構造ではないこと等、こちらのリサーチ不足、学校との対話不足で当初のねらいが外れたこともあれば、反対に予想もしないところで美術や美術館の可能性が大きく拓けるのも目の当たりにできた。このポジティブな展開は、何より参加生徒に多くを負っている。各事業の所感記録集前半で簡単に述べたが、特に印象に残った出来事を挙げて活動を振り返りたい。

まず、「学校美術館」について。12月に西日野にじ学園で実施した「学校美術館」には、通常の学校美術館とは異なる大きな挑戦があった。それは彫刻9点のうち3点を「触れる作品」として出品したことである。

視覚以外の感覚も使って作品を鑑賞したいという希望は、担当教員から提案されたものであった。触る作品を設けることについて、全く不安がなかったわけではない。広瀬浩二郎氏が提案しているような「やさしくゆっくり洋々と」³した触り方からはほど遠い、乱暴な接触が生まれる可能性もある。そして、普段触れないものが触れるということになれば、触ることそのものが目的と化し、作品と真摯

に向き合うことがかえって難しくなるかもしれない。充実した鑑賞を促進するためには、鑑賞者と作品の出会いの場を慎重に演出する必要があった。

迎えた当日、校長室での鑑賞に立ち会い、「触る」効果を実感するのに長く時間はかからなかった。入室し、視線を作品に向けず所在なげにしていた生徒も、ひとたび作品に触れば、たちどころに作品に注意を向けることができた。作品に触れ、文字通り一体化し、つながることで、鑑賞体験は確実に深化したのではないか。2016年に兵庫県立美術館で開催された「美術の中のかたち一手で見る造形」展⁴会場でも、「つなぐ」鑑賞、すなわち手で捉えた部分をつなげて徐々に全体を把握していく鑑賞が音声で促されていたが、西日野の展示でも、児童生徒は、手で頭や耳、鼻を順番に撫でてパーツを組み合わせながら、時間をかけて作品全体のかたちをつかむ鑑賞を自ずと行っているように見受けられた。佐藤忠良の《群馬の人》を触りながら「自分もこういうものを作りたい」と口にした生徒もいた。後日学校では、生徒の発言が契機となり、紙粘土を使った塑造に挑戦したとのこと。塑像に触る体験は、制作の大きなヒントになったのではと期待するが、果たしてどのような作品が生まれたのだろうか。

視覚を使って愛でられる美術作品には、その視覚的意義、特徴が作品の価値と同一視されているものも多いだろう。手を動かして生徒が作品のかたちを捉える様子は、作品に新たな価値を付与する可能性も秘めていたかもしれない。既にさまざまな美術館で取り組まれているが、美術鑑賞における触覚使用の可能性、「触る鑑賞」の効果を当館スタッフも改めて実感する機会になったのではないか。

そして「ワークショップ」。これについては貴家が詳述しているが、筆者自身も予想だにしない経験を得ることができた。学外の間が、教室に突如現れ授業を始める。状況をすぐには呑み込めない生徒もいたが、ファシリテーターが点火した創作の火が、徐々に会場全体を包み込み、気付けば生徒も教員も、アシスタントも保護者も、作り出すことに夢中になっていた。めまぐるしい制作過程は、カメラにおさめられたのでそちらをご覧ください。12月8日の西日野にじ学園でのワークショップでは、1日かけてステンドグラス制作に生徒が挑んだ。教員は「今日は出席している生徒が全員参加できた。これは奇跡的なこと。」と言っていたが、ここでも非日常的なワークショップの熱を見た気がした。

最後に「成果展示」について。幸運にも、今年度は2校ともに「成果展示」会期中の来館が叶った。生徒らは友人同士でそれぞれの作品を鑑賞する楽しさや、同じ空間で自分たちの作品が並んでいることから得られる一体感も感じることもできたのではないだろうか。学校の来館には立ち会えたが、残念ながら、作者の保護者や友人が来館し鑑賞している現場には未だ遭遇できていない。来館するグループを見かけたら、どのような会話が現場で繰り広げられているのか、耳を傾けたいと思っている。この展示が、自尊感情を高めるための装置として少しでも機能してくれたら、と願ってやまない。

展示を見た人々から個別に感想を聞いたり、スタッフを通して反応を聞いたりする機会はあるが、やはりこれらの感想は、集約して学校に返すことができはじめて、展示を主要機能として持つ「美術館」の面目躍如となったのではないか。来館者の声を聞き取る仕組みを会場に設けられなかったことは、数ある反省点のうちの1つである。

年度末を迎えた今、振り返れば、この事業は美術館資源に加え、アーティスト松岡徹氏の力、玉城わかば学園、西日野にじ学園の先

生方の熱意、そして何より、参加生徒のエネルギーに常に助けられていたと言える。連携しようとする立場の異なる大人を結びつける要となったのは、生徒たちに他ならなかった。スタッフを励まし勇気づけてくれた両校の生徒の皆さんには本当に感謝している。

そして、非日常的な体験を苦手とする生徒も多いなか、それを最初から撥ねつけるのではなく、不可能を可能にするために労を惜しまなかった教員の存在があってこそ、事業は成立した。学校現場での調整、美術館との連絡調整にも、教員の皆さんには相当お骨折りいただいている。そのような奔走の原動力となったのも、生徒が必ず想像を超えた創造力を見せてくれる、という教員の大きな期待ではないだろうか。

アーティストの松岡氏は、入念な打ち合わせ、準備やリハーサルを経て、常に改善を検討しながら真摯に事業に向き合ってくれた。ある時は表舞台で、ある時は舞台裏で、ワークショップと成果展示を引っ張り、支えたのは、松岡氏と名古屋芸大の卒業生、学生の方々である。当日目が行き届かなかった事業の細部は、撮影を担当した松原氏、江坂氏のレンズを通して観察し、検証することができた。

最後に、どのような依頼も楽しんで対応してくれたボランティアと同僚たち。美術館の職員も学び、ボランティアも学び、生徒はボランティアからも学び…と、あらゆる方向の学びのベクトルが交差し、複雑でいて幸せな互恵関係が成立したように感じている。数え上げればきりがないが、事業に関わってくださったすべての方に、心からお礼を申し上げたい。

この連携事業は年度単位の取組のため、今回関わった生徒・学校を対象に同じ事業を継続して行うことはできない。今回のように、外部との交流、地域交流を狙ったプロジェクトも、やはり関心を抱く層は美術館や特別支援学校の関係者に限定され、一年の事業を通して育まれた成果が、どうしても美術館と学校の二者の間で完結させるには豊かに過ぎ、あまりにも惜しい。

生徒の社会貢献を可視化し、より多くの人に活動の成果を享受してもらうことはできないだろうか。このような考えのもと、次なる活動の準備に取り組んでいるところである。

（すすむら・まりこ / 三重県立美術館学芸員）

【註】

1. 当館が過去に行った展示の「ソフト面」を活用した教育事業については以下を参照。
拙稿「作品を作品たらしめるもの―展示ワークショップを考える」『HILL WIND』35号、2014年10月、5頁
同「展示を解(ほど)く」『HILL WIND』40号、2017年3月、5頁

2. *La Classe Louvre*. Dir. Juliette Senik, Les Films d' Ici & Musée du Louvre, 2006. Film.
映画「クラス・ルーヴル」監督:ジュリエット・セニク / 2006年 / 制作:レ・フィルム・ディシ、ルーヴル美術館

3. 広瀬氏が提唱する、さわるマナーについては、例えば以下を参照のこと。
広瀬浩二郎「「手学問」理論の創造――触学・触楽・触憚するフイーリングワーク」『さわって楽しむ博物館 ユニバーサル・ミュージアムの可能性』（広瀬浩二郎編著）、青弓社、2012年、92―113頁
とりわけ107―111頁を参照。

4. 「美術の中のかたち一手で見る造形」展は1989年に始まった兵庫県立美術館の恒例企画。2016年7月2日―11月6日に行われた同展は、広瀬浩二郎氏プロデュースの下、視覚を遮断して音声解説を聞きながら彫刻作品に触る体験を提供した。「つなぐ」は同展の3つのキーワード(つなぐ・つつむ・つかむ)のうちの1つ。企画は同館学芸員の河田亜也子氏。展覧会については、以下が詳しい。
河田亜也子 「「無視覚流」の道を探る―一視覚によらない鑑賞について」『ART RAMBLE』52号、2016年9月、2―3頁

特別支援学校での ワークショップを終えて

貴家 映子

美術館としては昨年度に引き続いての特別支援学校との連携事業であるが、私自身は、特別支援学校の先生や生徒たちと一緒に仕事をするのは初めてである。そのなかで担当することとなったワークショップは、どんな環境で、どんな生徒たちを対象に、どんな体験を作り出すことができるのか、当初は想像すらできなかった。

最も恐れていたのは、生徒たちが慣れない素材や方法に直面して、関心を持てなかったりパニックを起こしたりして、制作に取りかかれないうままワークショップが終わってしまうことだった。そのため、講師となるアーティストには、そうした状況に直面しても対処できる資質が求められた。また、美術館での展示構成までを一つのプロジェクトとして完成させてもらうことを期待した。

そこで、松岡徹氏に白羽の矢を立てることとなる。老若男女を対象にしたワークショップや、大学教員としての豊富な経験に加え、愛知県佐久島でのプロジェクトなどでは、社会とのつながりを保ちながら、ユーモラスで大らか、それでいて存在感のある造形物を一貫して制作している作家としての個性も、どこか今回のワークショップには向いているように思えた。

ワークショップには、障がいの程度もさまざまな生徒約50名近くが、両校ともに参加することになった。そのため、個性の異なる全ての生徒たちがそれぞれの段階で創作を楽しめるようなプログラムが必要となる。手先が器用だったり、作りたいものを頭に描き、実際に形にできる生徒たちが、それぞれに創意工夫を発揮できるだけでなく、いずれも得意でない生徒も、どこかの段階で自分なりの表現ができ、展示する作品が作り出せる。そんな場を求めて、松岡さんと内容を検討した。担当の先生方とも打ち合わせを重ね、結果として、二校それぞれに異なるプログラムを、計3日間に渡って実施することになった。

いずれのプログラムにおいても、制作は大きく分けて2段階に分かれており、それが上手く作用することになったように思われる。例えば、紙貼りランプを作った玉城わかば学園では、粘土に触れることがなかなかできず先生やスタッフに形をつくってもらった生徒でも、紙貼りには興味を示し、ティッシュを割いたり、刷毛でボンドを塗ったりする作業を楽しむことができた。ステンドグラスを作った西日野にじ学園では、自ら下絵を描くことができない生徒たちは、先生方が用意した図柄をもとに黒い枠取りを行ったが、色塗りの段階では、自分なりの色の組み合わせを作り出すことができた。

実施に当たって、最も悩まされたのは、制作のどこまでを生徒たちの自発性にゆだね、どこから手助けすべきか、ということである。上手く粘土が扱えない生徒については、作りたいものの形がイメージできていればなおさら、希望を聞き出しながら随分手を入れてしまう場面もあった。反対に、作りたい形が想像できず、球体など単純な

形の成型に終始する生徒もいたが、出来上がったランプは彼自身が作った唯一無二の造形となった。この問いについて答えを出すのは難しいが、プログラムを決定した際に念頭に置いた目標は、概ね達成できたのではないだろうか。

スタッフとして加わってくれた名古屋芸術大学の卒業生や在學生にも助けられた。「作る」ということが日常の行為になっている彼らは、「生徒たちに創作体験をさせる」という抽象的な目標に拘泥せず、目の前にある粘土や画材に向き合い形あるものを生み出す手助けを、気負いなく行っているのが印象的だった。そこに上手く波長が合った生徒は、手と言葉（あるいはそのどちらか）でコミュニケーションを重ねて、その生徒なりの作品を作り出していった。

ワークショップを担当することとなった当初は、とにかく不安で仕方がなかった。実施後、「楽しかった!」と思えたのは、講師を引き受けてくれた松岡氏と協力してくれたスタッフ、同僚、そして何よりも、一所懸命に素材と向き合い作品を完成させた生徒たちのおかげである。また、時間内に終えられなかった行程を次の授業や時間外にも引き継ぎ、輸送に耐え得るように手を入れるなど、多くの時間を割いていただいた先生方にも、深く感謝申し上げたい。そうして、各校の高等部1年生ほぼ全員の作品を展示することができたのだ。

大きな反省も残る。美術館のコレクションを活用しながら、特別支援学校と社会とをつなぐことを目的とした本事業のなかで、当初は、ワークショップでも鑑賞と制作が連動するプログラムを想定していた。しかし、スケジュールや物理的な制約、私自身の力不足によって、両者に十分な結びつきを持たせるには至らなかった。最大の要因は、美術鑑賞から受ける刺激やインスピレーションが、特別支援学校の生徒たちにとってはどのようなものなのか、あるいは、どうあるのが望ましいのか、私自身が具体的なヴィジョンを描けていなかったことにある。

絵画や彫刻が生み出された動機や作者の欲望、それらと私たち自身の生や現実との結びつきに触れ、心が共鳴・反発し、新しい視野が開ける—そうした体験の場を、コレクションの強みを活かして、障がいの有無にかかわらず多くの人に提供したい。上記の反省を踏まえ、そんな思いを今強く抱いている。そのための具体的な方法を検討するために、ワークショップやそこで生まれるコミュニケーションが有効な手段となることは、本事業を通しておぼろげながら自信を持った。この経験を糧にし、これからの美術館活動を通じて研究と模索を積み重ねていきたい。

(さすが・えいこ / 三重県立美術館学芸員)

担当教員のコメント

三重県立特別支援学校玉城わかば学園高等部教諭

大山 展弘

作家の松岡徹さんを本校にお招きし、普通科コース1年生が、ワークショップに参加しました。教材は張り子のランプシェード、生徒たちは、普段扱ったことのない油粘土と格闘しながら、好きな動物を形作っていきました。気温が低かったため、粘土が思ったより固く、形を作るのに苦勞することもありましたが、スタッフの方々に助けをもらいながらなんとか形にすることができました。次に、できた形をラップでくるんでから、ティッシュを水溶きボンドで貼り重ねていきました。生徒たちにとっては、難しい制作でありましたが、スタッフの方々にアドバイスや手助けをしてもらいながら共に作り上げることができて、とても満足感のあるワークショップとなりました。ワークショップを通して、松岡さんやスタッフの方々など、様々な人たちと関わることは、生徒たちにとって意義のある経験となりました。

後日、美術館にご招待していただき、成果展示を鑑賞することができました。明かりの灯された自分たちの作品が並んでいる展示を、生徒たちは嬉しそうに眺めていました。帰りのバスでは、美術館に自分たちの作品を展示してもらった喜びを、みんなで分かち合うことができました。生徒たちが普段の授業だけでは経験できないことを、美術館のご協力により体験できたことを感謝したいと思います。

三重県立特別支援学校西日野にじ学園高等部教諭

田口 万紀

アート連携事業の素晴らしい点は「見る」「聞く」と受け身の美術ではなく、生徒自らが作家や美術品を身近に感じて制作に取り組めたところ です。

訪問授業では美術館所蔵のシャガール作品「枝」を題材に、ステンドグラス制作を指導して頂きました。導入でパズルやICTなども活用し、遊びの感覚と映像が生徒の興味関心を引き出しました。完成した作品は色や光だけでなくオブジェとしても楽しめ、複数の作品を被って見え方の違いを楽しんだり、友だちの作品と積み重ねたりして自由な発想で鑑賞をする姿がありました。また、その後の美術館訪問で多くの作品の中から「枝」を見つけた時は、親しみに満ちた歓

三重県立特別支援学校玉城わかば学園中学部教諭

生川 朋義

本校は地理的に県立美術館とは離れた場所にあることもあり、県立美術館を利用した経験のある児童生徒はごく限られているようです。保護者の方からしても、「作品に手を出してしまったら…」とか、「静かに鑑賞するのは難しいのでは…」と心配をされ、少し縁遠く感じていらっしゃる方もみえるのではないかと思います。しかし、今回「学校美術館」ということで美術館が所蔵している作品を鑑賞している子どもたちは、我々教員が想像していた以上に、熱心に、興味を持って、本人なりにマナーを意識して鑑賞することができていたように思います。本物が持つ迫力や美しさは、子どもたちの気持ちを惹きつけ、美術作品との距離を近づけてくれたように感じられました。これを機会に、美術館に行ってみたいと思う児童生徒が出てきてくれることを期待しています。

今回、このような機会を設けてくださった関係者の皆様に深く感謝を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

声や笑顔が多く見られました。また、学校美術館では本物の彫刻に触れ、視覚と手指の感覚を通して鑑賞ができ、この体験をきっかけに創作活動に興味を持ったという意見が多く聞かれたことは本当にうれしい驚きでした。

造形の楽しさがいっぱい詰まった学びにご尽力いただいた三重県立美術館職員様、関係の皆さま、本当にありがとうございました。

「アートでつなぐ・特別支援学校と地域との連携事業」記録集

● 編集・執筆 [担当]

三重県立美術館 [鈴木 麻里子 (pp. 2-3, 6-9, 16-29.)
貴家 映子 (pp. 4-5, 10-15, 30.)]

● デザイン

水川 史生 (en design studio)

● 撮影

松原 豊 (pp. 4 (中、右), 5 (中、右), 7-9, 11-12 (下段), 16, 18-19, 22-27.)
江坂 文孝 (pp. 4 (左), 5 (左), 6, 11-12 (上段), 13-15.)

● 発行

アートでつなぐ・特別支援学校と地域との連携事業実行委員会
514-0007 三重県津市大谷町11番地 三重県立美術館内
TEL. 059-227-2100 (代表)
FAX. 059-223-0570

● 発行日 2017年3月31日

アートでつなぐ・特別支援学校と地域との連携事業実行委員会 ©2017
本記録集掲載の写真・文章の無断転載・複製を禁じます。

平成28年度 文化庁 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業

